



ユーザーガイド  
マニュアル  
User's Manual 0

著：小鎬 三斎  
表紙イラスト：神埼輝

# ユーザーズ・マニュアル#0

小鎬 三斎 著





S  
t  
a  
g  
e  
0  
【破壊の力】

魔法というものに憧れを抱いた事のない者はいないであろう

血みどろの戦いの嵐が吹き荒れる中世の欧州には、力を欲し悪魔と通じたが故に迫害された魔女が存在していた

栄耀栄華を極めた平安の日の本の暗部では陰陽師と呼ばれる者達が人の世の羅針盤となり

大戦の闇に蝕まれた露西亜においては、人の脳の新たな可能性を追い求めた超心理学が盛んに研究されていた

その存在は目には見えないものゆえに、力なき者達から荒唐無稽な迷信と一笑に付されながらも、強く人を魅了し続けてきた、人の心が持つ不思議な力。

その歴史はまさに、人の歴史そのものであった

そして、歴史は今も………

人は皆、あまりに深い、償い切れぬ罪を背負ってこの世に生まれてくる。

誰かに対して、憤る。誰かを妬み、羨む。誰かを見下し、驕り昂る。

食えるものがあれば際限なく喰らい尽くし、美しき者には獣の如き下心を露呈し、手に入るものは全て手に入れようと目論み、耐え難い現実には直面すれば逃げ道を探そうと躍起になる。

人は罪とともに生まれ、生きる過程で更に罪を預かり、際限なく重ねる。そうしなければ人でいることが出来ないから。



恐らく人の一生というものは、償い切れぬその罪を償うためだけの、永遠の苦行<sup>ばっ</sup>。地獄がもしもあるならば、大きすぎる罪を抱えた心を小さくやわな肉体に縛り付けた人が生きる地上そのもの。そして如何に大きな罪を背負い生まれた人も、罰を十分に受けて、それを終えるときは須らく重すぎる罪を振り捨てて、曇りなき清廉な心のまま逝くものなのだ……。

少年は、そう信じていた。

明日の降雨を告げる傘を被った朧月が躍る深夜の静寂を、バイクのエンジン音と血の臭いが引き裂いていく。

人や車の通りも、繁華街の毒々しいネオンサインの点滅も疎らになつた大都会の国道を満たす大量の排気ガスと大音量のホーンとエンジン音、そして無軌道な若者達の狂喜の声……。

それらの響きはごくありふれた大都会の国道を濛々と殺気立ち込める無法地帯へと変えていく。

混濁たる真白の夜霧にも似た濃密かつ冷徹なその殺気は、力無き人の体にはどんな劇物よりも強い致死性、そして即効性がある。

うっかり触れたり臭いを嗅いだりすれば、たちどころに強力な毒

はその鋭い牙を剥き、気安く触れた哀れな犠牲者の全てを食い散らかす。

今日もまた、幾人か被害者が出たらしい……。殺気に混じって何よりもきつい、ひと舐めすれば不快な鉄の味が口腔に満ちる血の臭いが周囲に漂う。

無論それらの主は高濃度の排気ガスと爆音をあたりには振り撒きながら、我が物顔で冷たき国道を駆けて行く、人の姿をとった狂犬達だ。

僅かに街に残った人は須らく音と彼の者の影に怯え、命乞いの準備をせんとする……。その全てが無駄だという事は承知の上で。

一步間違えば直ぐにでも野戦病院に、更に下手をすれば死体捨場になりかねないピリピリした空気に満ちた国道を幅一杯に埋め尽くす勢いを持って駆けて行くのは、この辺りでも札付きとして名高い暴走族連中、名を関東弩羅殿会という。

欲しいものがあれば奪い、気に入らないものはたちどころに殺し、まさに己の有り余る力と欲望の赴くままに騒音、恐怖、そして死を撒き散らす、その全てが非常に危険な奴等。

構成員の数は既に二百を超え、しかもそのひとりひとりがまさに手の付けられない狂人という、正真正銘の武闘派集団。

当然の如く、国道沿いの住民も警視庁の敏腕機動隊も皆彼等を、

そして彼等の報復を恐れていた。

彼の者達は決して存在そのものを許されてはいけな、紛れもない街の害毒。

だが、力なき人にとって、その毒はあまりに強力すぎる。

致死性の高い毒に立ち向かってそれを除去しようなどという勇氣……いや蛮勇を、良識ある人はまず起こさない。それをするものはよつぽどの莫迦か極め付きの命知らずだと彼等は言う。

君子危うきに近寄らず。障らぬ神に崇りなし。かような者は相手にせず、無関心を決め込むのが一番の対処法……

それが現代に生きる人の常識、若しくは処世術であった。

………少なくとも、今宵までは。

「気に喰わねえ……」

冷たい国道に立ちつくした一人の少年はそう呟くと、左右両の拳を硬く握り締め、轟音の方向へその視線を定めた。

群青に近い黒髪の両サイドに銀のメッシュを入れ、普段着として愛用しているシルバーのトップスとモスグリーンのロングパンツに身を固めた彼は……轟音を上げながら向かってくる無数の狂戦士達

の四キロメートル先に立ちほだかり、先頭の一団をキツ、と見据える。

音が近付いてくるにつれ、憎悪とも、義憤ともつかない抑えきれない胸の滾りは少年の中で、そのボルテージを上げていく。

この場に誰か良識ある大人がいれば、"死ぬ気か、やめろ"と彼を止め、国道から引き離して説教の一つでも垂れていただろう。

ここにいたのがこの少年ではなく他のまともな人であれば、すぐにその者に一つ頭を下げて、大急ぎで逃げ帰ったことであろう。

しかし少年にそんな気はさらさら無い。彼には無法者の真っ只中へ飛び込んでも生還できるどころか、彼等を一人も生かす事なく斃

せる自信があつた。

成長期特有の瘦軀に見合わない程の強大な“破壊の力”を迸らせ、それこそ骨の一片も残す事無く対象を消し飛ばす自信が。

国道のほぼ全てを覆う程の勢力を持った者達を見据えて、彼等一人一人がどれ程の戦力を持っているのかを、生まれ持ったその感覚だけで瞬間的に判断する。

一団の中の一人だけを見れば、直ぐに分かることだった。

トップスピード七〇キロ毎時。体軀は自分より一回り大きい程度。主武装、全長一メートル前後の木刀および鉄パイプ。



その身体で本気で振るえば、人の骨の一本や二本は軽く打ち砕くだけの威力を秘める、紛れも無い人に危害を加えるための凶器だ。どうぐ

とはいえ、やはりそこは近接武器。少年の持つ“破壊の力”は、そののほぼ倍以上の威力と、倍以上の間合いをカバーできる……要は、奴等の間合いの外から完膚なきまでに打ち倒せる。

多勢に無勢、そんなことは全く無い。万に一つも負ける要素は存在しない。

むしろそもそも問題は、彼奴等がその凶器を、まるで携帯電話かパス・ケースを持ち歩く感覚で手にしているという事。

そしてそれは、この場にいる僅かな無関係の、力の無い人間にの

み振るわれるという事。それが何より、少年は癩だった。

奴等が撒き散らすのは騒音だけではない。集団というものの生み出す言い知れぬ恐怖、歯止めというものを知らぬが故の理不尽な暴力、そして、死。

彼等に直接的、あるいは間接的に、しかし無残に殺された人間が一体何人いたかは想像に難くない。

そんな奴等が“癩に障る”。

少年にとって、彼奴等を潰す大義名分りゅうめうはそれだけで十分だった。更に言えば……。

「国に護られてるって幻想を抱いてる、てめえらの全てもよ」

そう。彼等はものの見えぬ大人の作り上げた、抜け穴だらけの少年法という悪法に護られている。

エンジンの空ぶかしを注意した者を鉄パイプで撲殺しようが、じつとりと好奇の眼差しを向けた物好きな者を大径のタイヤで轢殺しようが………国に、少年法に護られている限り、絞首台だけは須らく免れる。

それが、少年は尚更気に喰わないのだ。

……ならば、そんな彼奴等を地獄の最底辺に叩き落してやる事に、何の問題もない。いや、今は奴等をそうしたくて仕方がない。少年の行動理念は極めて単純なそれだった。

暫くするとかの無法者達はその襲来を待ち受ける少年のもとへ辿り着き、あつという間に彼を囲繞する。

血やオイルの臭いと耳障りな駆動音に隙間なく包囲されながらも、少年はその冷淡な表情を崩さない。

「あん、何だテメエは！！」

「轢き殺されてえのか、おいっ！！」

無法者達が鼻息を荒げながら少年をグルグルと取り巻くように走

り続ける。極彩色の髪に崩れかけた顔、無駄に大きな体躯と目に優しくくない様々な色の特攻服。

センスという言葉などとは無縁の彼等は、少年を脅すようにわざとエンジンを大きく吹かせながら、めいめいに大音量で喚き続ける。不協和音が少年の周囲を満たしていた。

本当、鬱陶しく騒ぐことだけは上手い奴等だ。集団になれば、その手に鈍器を持てば、大きなバイクに乗れば、それだけで強くなつたと思ひ込んでいる。

それが少年は余計に気に喰わない。ならば……………。

「……………死ねよ」

瞬間、少年の意志は、実行に移された。

ギリシャ  
希臘神話の大神ゼウスがその權威の証たる雷の錫をそうするよう  
に、少年……姫鶴脩は、固く拳を握り締めた右腕に渾身の力を込め  
て、無法者達の群れに向けて振り下ろす。

その中の一人に“力”を直撃させると彼の者は悲鳴を上げる間も  
無く後方へ派手に吹っ飛ばされ、大きな放物線を描いた数秒後に国  
道に叩き付けられた頃には最早身元確認も儘ならないほど、その身

体を粉々に粉碎されていた。

大枚叩いてあしらえた派手な特効服が橙の炎を上げて、めらめらと燃え盛る。

閻魔様の裁きを待つ前に目の前で無間地獄に落とされた仲間の姿を見せ付けられ、啞然とする無法者達。脩はそんな彼等を一人、また一人と、その華奢な身体を駆け巡る“力”を碧の弾丸に変えて撃ち放ち、絶え間なく彼の者達の肉体に叩き込み、その全てを皆同じ真っ黒焦げの肉塊へと変えていく。

姫鶴脩——ひめづる、しゅう。

一七歳と四ヶ月、乙女座のB型。

都内の私立高校聖エミール学院、二年月組所属。

異能力研究の権威たる天才自然学者にして最大の異端児、今は亡

きひめつるきよう姫鶴鏡博士の忘れ形見。

そして彼の提唱した、学会でもオカルト業界でも語り草となっている、人を大量破壊兵器に変える悪魔のプロジェクトの被験者……

……！

「う、うわあああ！！」



「なんなんだコイツはあつ！！」

恐れをなして無様に逃げ出す者の背中にも、容赦なく一発。そしてその度に出来上がる真新しい焼殺体。

気が付くと軽く六〇人程度はいた無法者はたったひとりだけになり、そのひとりだけの男も自分が骸の山の中にいるという恐怖に怯えながら、姫鶴脩という少年を見上げていた。

「ひっ、ひいいい………！！」

目の前で起きた惨劇に腰を抜かし、身体の彼方此方を痙攣させ、引きつった表情のまま後退る。そんな彼の無法者の存在を認めた脩はその腕を彼に翳し、少しずつ力を込めてゆく。

「は、はわ、はわわわっ………!!!」

目の前に突き出された右腕から放たれる、仲間を打ち砕いた碧の  
烈しい光。炎でも雷でもない、この世の何よりも強く純粋な破壊の  
光………。

それは先程の少年の台詞が決してハツタリでは無い事を証明し、  
同時に、無法者にこの後起きる一つの現実を突きつける。

たった一人の少年の手により目の前で起きた現実。眼前の光が自  
分に向けられる可能性。それが齎すこの世で最も無様な死。

それら一つ一つが一本の糸になり、無法者というリリアンによつ  
て丹念に織り上げられ、恐怖という鮮やかな斑の組紐を作り上げる。

その斑の組紐を、己の意思と関わりなくその手首にかける事を余

儀なくされた者が唯一出来る事はただひとつ……。

……この場から、逃げる事だけ。

「お……っ。おたすけえ！！」

恥も外聞も最早無かった。今は一刻も早く逃げ去りたかった。少年の手の及ばないところであれば何処でもよかった。

男は只管逃げた。前もろくに見ずに逃げ続けた。無論……その全てが無駄だという事は、何一つ彼は分かっていたが。

——ドゥツ。

刹那、碧の閃光と烈しい灼熱、背中から伝わったメガトン単位の衝撃が、男の全身をリニアモーターカー並の速度で駆け抜けていく。

筋肉、脂肪、臓器、骨格、その他諸々が白い煙を上げながらパンパン弾け、身体はどこかから手持ち花火のような火花が噴き出す。

やがて男の身体のパーツの大きさ自体も倍以上に膨張し、耐熱温度が限界点を超えた時……ぼん、という派手な爆発音とともに、男の一つの身体は木っ端微塵になって彼方此方に散乱した。高熱により気化してしまったのか、流れ出た血は驚く程少なかった。

………その全てが、一瞬だった。

放物線を描いて宙を飛んだ無法者がアスファルトの上を何度か回転して止まった頃には、彼は己の先を逝った者達と同じ黒焦げの肉の塊となって、冷たい夜のアスファルトの上に横たわる。

そんな無法者達の残骸を一瞥し、脩はその視線を改めて国道の方に向ける。

……粗方、雑魚は潰した。これだけ派手に暴れれば親玉も必ず現れる。

「出て、来いや」

眩きが血煙に乗って、言の葉を伝えようとするように、一つの方  
向へ飛び去る。

……そいつは、すぐに現れた。

「へっ。テメエ、随分と派手にやってくれたじゃねえか」

ドスの利いた低音が脩の背後に響く。それを聞いた脩は口元に小  
さく笑みを零した。

どうやら、あの眩きは無事に届いたらしい。一九〇センチは軽く  
超えているであろう、ブリーチで派手に染め上げたブロンドのオー

ルバックが夜風を切り、特注品と思しき鮮やかな黒の特攻服を纏ったそいつは、先程脩がぶち砕いた手下の残骸をバックに、悠然と仁王立ちしていた。

「何だい………悪名高き弩羅殿会総長とか言うからどんな殿つい野郎かと思ったら、なかなかどうして男前じゃねえか」

「野郎、何のつもりでこんな事をしでかした？ 返答次第じゃただで済まねえぞ」

「……五月蠅く騒ぐテメエ等が癩に障った。それ以外に理由があるか？」

「ふん。癩に障ったら殺すのか。どうやら腕は立つらしいが、頭の

方はさっぱりらしいな、貴様は」

……よく言うぜ。そいつはテメエ等だろうが。敢えてそれを言葉には出さず、その意識を右腕に集約させ、体内を流れる強大な力を碧のスパークとして具現化させる。脩の「破壊の力」……。

それは学会始まって以来の、狂気の天才科学者たる父が提唱したプロジェクトの産物。

弩羅厳会総長たる眼前の男の口元からふっ、という音が漏れるのを、脩は聞き逃さなかった。

「こいつめ、余裕かましやがって……！」脩の怒りはスパークの輝きを更に高め、その眼の烈しい輝きも更にその輝度を上げていく。



今に見ている。テメエは手下みたいに綺麗に死なせてはやらない。その鬱陶しい面も、似合いもしない特攻服も、テメエをテメエたらしめている全てを、この“力”でこの世から残らず叩き出してやる。

脩の中に迸る碧の破壊の波動は、あと少しで最大出力に達する。コイツを男の土手っ腹に叩き込めばいい。それだけで、奴の体は粉微塵に消し飛んで跡形も無くなる。

奴を完全に潰す。そのために、姫鶴脩はここにいる………！！

「総長くっつ……！！」

と、二人の間に割って入ったのは、白い安物の特攻服の小男。族

にはあまりに不似合いな情けない面とともに総長の前へ躍り出る。

恐らくアイツは会に最近入ったばかりの一番の下っ端だろう。理由はどうあれ、仲間から少々出遅れた為にこの場を生き残ったらしい。

「大変ですよ！ 俺の班もやられちゃいました！ もうすぐサツどもも来やがりますっ！！」

泣き顔でそう訴える小男。逃げましょう、ここは逃げたほうが勝ちです。その意思を精一杯伝えようと努め、掠れた声を張り上げる。

だが、彼を見つめる総長の眼は……何よりも、どんな利器よりも、冷たい。

「テメエ、仮にも天下の弩羅巖会の癖に、むざむざ逃げてきたんじやねえだろうな」

「でも……でもっ！ あそこで逃げなきや、全滅してましたよ！  
分かってくだ……っ！？」

「腰抜けが。うちの会にや、テメエみてえな奴の席はねえ………  
……！！！」

刹那、小男の眼前に総長が右の掌を翳すと。五尺にも満たない低身長の男の身体は、万有引力に逆らってふわりふわりと宙に浮く。

高度にして約四メートルは超えただろう。踏みしめる大地も、その手に掴むものも、平衡感覚も失った小男は、両の手足をばたつかせて見つとも無く足掻き続ける。その間も高度は更に上昇し、大体

国道に立つ街灯と同じくらいになっただろうか。

総長が翳した右手を横に払うとその力に指向性<sup>ベクトル</sup>が与えられ、小男はそれと同じ方向へ高速で飛び去った。

ドガシヤア、という鈍い破壊音が闇に響く。ビルの壁面をキヤンパスにした悪趣味なモダンアートの完成する。

全身を叩き付けられ、餅みたいにコンクリートにへばり付いた小男が不帰の客となる………それらがほぼ同時だった。

「念動力<sup>テレキネシス</sup>……。テメエ、遣い人か」

ユルザ  
遣い人。

魔女の用いた西洋の魔術、修験道や陰陽道に代表される東洋の呪術、気功、交霊、ESP、ヒーリング……。

現代科学の及ばぬ人の心……思いが生む力……不思議な力を、それこそ手足の如く自在に使いこなす存在の総称。

己の念を物体に送り込む事でその手で対象に直接接触れる事無く、重量や大きさに関係なくあらゆる物を動かす能力……テレキネシス。

この絶大な力を持つ弩羅殿会総長もまた、魚から猿、そして人という悠久の時と進化を経た先の、更なる進化形たる遣い人の一人……

……！！

「だからどうだっただってんだ!？」

その総長の返答はあまりに粗暴な、あまりに素気ないそれだった。

「まあ、確かにコイツは便利だ。遠くの物や金を易々と盗ったりも出来るし、分厚いサツのバリケードだって退かす事が出来る。そして当然、こんな事もなあ!!」

叫びとともに再びテレキネシスを発動した総長の手から……斃された仲間のバイクの残骸が放たれる。標的は勿論眼前に立つ脩だ。

三〇〇キロを言うに超える七五〇ccバイクの残骸は恐るべき速度を持って宙を舞い、哀れな犠牲者たる脩を押し潰し……。

「分かってんのかあ？ 要するに、俺は選ばれた人間なんだよ。この力はこの世で最強を名乗ることが出来る最大の権利だ！ コイツ

がある限り誰も俺を倒せねえし、俺を裁くことも出来やしねえ！！  
分かったらクソガキはとつとと跪いて俺様の靴でも………」

「確かに、な」

は、しなかった。総長の力を受けて宙を舞ったバイクは空中で大爆発を起こし、橙色の炎と碧の光が、辺りを染め上げる。

両の掌から光を迸らせた脩の面が、総長の烈しい怒りを更に滾らせる。総長はギリギリと歯を鳴らしながら脩を睨みつけていた。

バイクを叩き落した脩は改めて改めて総長をキツと見据える。奴の下卑た笑いさえもその全てを焼き付けんとばかりの、鋭い眼差しで。

「確かにテメエ等遣い人は選ばれた人種だ。クロウリーの唱えた”  
汝の欲するべきところを為せ”という言葉の体現者だ。その力を己  
の中で眠らせて腐らす事無く、己自身の為に最大限それを振るう：  
…。ある意味じゃあ、一番人間らしいと言える生き物だ。だがよ：  
…」

「ああん？ 結局テメエは何が言いてえ！！」

「”力”は決して、誰かを傷つけたり騙したり殺したりしていいと  
いう許可証ライセンスじゃねえ。そんな権利は、この世に生きる誰にもねえ：  
……………！！」

自分にとっての悪……………この場のぶつけどころを見出した脩の力が、  
一際強く輝きを放つ……………！！



「バカかテメエは！ 俺達にはどんな法律も通用しねえんだ。要は何をしても許されるんだよ！ テメエも遣い人ならそんぐれえ分か  
ってんじやねえのか、ああん！？」

「……：……：そうかもな。俺達の力が“荒唐無稽な迷信”である限り、  
昨今のザルみてえな人の法はテメエ等の罪を裁けねえし、罰も下せ  
やしねえ」

生きることには罪を犯すこと、そして罰を受け償うこと……。

——少年は、そう信じていた。

だがその実どうだ。一步外の世界に出て辺りを見渡せば、力とい

う何よりも強い免罪符を手にした者が無数に存在する。

そしてそれに比例して、理不尽な罪に泣き、悩み、苦しみ、最後には殺される者がいる。

力が現代に生きる人にとって“荒唐無稽な迷信”である限り、現実世界のあらゆる法はその意味が失われる。

意味の消失は力持つ者に驕りを生み、そうして罰を免れた彼等は、永遠に人が償えぬ罪をこの世に生み続ける……！！

「だったら……誰かが、どうにかしなきゃなんねえのよっ！！」

ならば俺が罰そう。人の世が裁けないなら俺が彼の者を裁こう。

そして、俺もまた償えぬ罪を、際限なく預かり重ねよう。

………少なくとも、俺にならそれが出来る。罪を犯すのは俺一人だけでいい。

俺はこの場で罪を………親父が与えたこの力で持って、許されざる存在である奴を裁き、罰するという大罪を犯そう。

決して揺るぎも歪みもしない、心に宿した一つの意味。もう一度その意思を脳の頂点てっぺんに揺さぶり起こし、脩はその力を勢いよく、眼前の弩羅厳会総長に………自分にとっての絶対的な悪に向けて振り下ろした。

破壊の力の強大な撃力が生む、右腕をダイレクトに襲う熱波と衝撃が、少年を闘いという深淵の中へと埋没させていく……。

## 後書き

どうも、これを読んでいらっしやいます殆どの方、初めまして。

ネットやらオフイべやらで初めて会った人からは大抵「名前なんて読むんですか？」と聞かれるこしのぎみつとき小鎬三斎です。

このたびこうして電子書籍版『ユーザーズ・マニュアル#0』を手にとって下さり有難う御座います。序盤も序盤、所謂お試し読切版ではありましたが、お楽しみいただけましたでしょうか？

某SNSにて描き合いイラストを作ってくださいった神埼輝様にも多大なる感謝を。今回喜んで表紙画像に使わせていただきましたっ。

何より完成までにお世話になった皆々様に万感の意を表します。

実はこの『ユーザーズ・マニユアル』の構想は今からずつと昔、それこそ高校時代からありました。

しかし当時の主人公の設定は超能力研究に携わるアメリカ人で、女性パートナー（割と美人）とともにアメリカ横断しながら戦いと研究の日々を送るというロードムービー調のそれ。今回主人公の脩は既にこの時にマイキャラの中にいたのですが、その時の能力というのが某A〇〇Sよろしく体の一部が刃物のような武器になるというエグいそれだったんです。

もつと言うとその時は某J●J●よろしく部ごとに主人公、そして舞台が変わる設定で、脩は第二部の主人公でした。んで、現在の

形を為すまでに色々と能力やら容姿やらの設定が変わって、前述のアメリカ人主人公の能力を引き継いで、今に到ってるって訳です。

しかも、まだその時脩は割と快活な好青年、しかしどっか猪突猛進な所アリって設定だったのに、今はすっかり真逆になってしまいましたね。いかに自分にブレる軸がないかの証明です。

んで、今回の本の元となる『ユザマニ』のパイロット版を書き上げたのは約三年くらい前。当時某同人ゲームの二次創作小説をとあるサイトで酷評されて、その悔しさを晴らすかのようにテキスト立ち上げて、まるで憑かれたようになった状態で書き上げたのが、前述のパイロット版の『ユザマニ』。今回の小説はそれを加筆修正したものです。

それからキャラクタやら世界設定やら作って行って、更にイラストだのゲーム製作だのとどんどん広がって……まあ、今の自分があるような感じ。

小説の借りを小説で返すとか、いやはや全くとんだ創作ジャンキーですね、自分。おそらくこの莫迦は死んでも治らないと思います。さて。無節操、無軌道、無計画という三無人間な僕ですけど、こうして自分の作品を電子書籍として世に出す事が出来たという事が足がかりに、一人のクリエイターとして今いる場所から一歩でも躍進していききたいですね。

取敢えず次の『ユザマニ』は長編。今回同様自分のサイトに上げていたストーリーの加筆修正版です。多分ないでしょうが当時の



それを読んだ方はそれと比べてみるのも面白いかなあ、なんて……。  
では、また次の機会に。

小鎬 三斎 拝

# ユーザーズ・マニュアル# 0

著者 小鎬 三斎

表紙イラスト 神埼輝

本書の無断転載を禁じます